

《論文》

『日本広東学習新語書』及び 『明治三十八年 戸口調査用語（広東語）』所 収の符号仮名(3)

山村 敏江

はじめに

神田外語大学神田佐野文庫所蔵『日本広東学習新語書』について、共同研究プロジェクトとして音韻面・語彙面の研究が進められているが、山村2019・2020に引き続き臨時台湾戸口調査部による『明治三十八年 戸口調査用語（広東語）』を比較対象として使用する。最終的には、両資料に使われる仮名表記（符号仮名⁽¹⁾）・字音体系の整理を通じて全面的な比較を目指す。

本稿では、両資料に使われる仮名表記の一部を、四県客家語・海陸客家語の字音に基づき分類、考察を行うこととする。

1. 研究対象資料・比較対象資料

研究対象資料の『日本広東学習新語書』（以下『新語書』）、比較対象資料の『明治三十八年 戸口調査用語（広東語）』（以下『用語（広東語）』）については、山村2019に述べたところであるため、本稿では省略する。

また本稿では、『広東語辞典』を比較対象に加えることとする。

『広東語辞典』は、昭和7年（1932年）、台湾総督府によって編纂・刊行されたもので、日本語25,000語に「広東語」（客家語⁽²⁾）の対訳を施したものである。全1,554ページ、東洋文庫所蔵本を原本として、昭和62年（1987年）に国書刊行会から復刻版が刊行された。

同書の凡例に「本書ニ採用セル譯語及ビ其ノ音ハ、臺灣ノ北部ニ行ハルヽ、所謂四縣中ノ鎮平縣ノ語及ビ其ノ音ヲ用ヒタリ」とあることから、台湾客家語

の標準音とされる「四縣腔（苗栗腔）」のうち「鎮平縣（現在の蕉嶺縣）」の言語に依拠しているのが分かる。ちなみに、客家語の代表とされる梅県方言（広東省梅州市梅县区・梅江区）は、蕉嶺縣の南に位置する。

同書はカタカナによる見出しの下に、日本語の漢字が書かれる。さらにその下に漢字で「広東語」が書かれており、その右側にカタカナ及び補助記号付きのカタカナによる音注と声調符号が付けられている。

2. 符号仮名

日本統治期の台湾では、台湾語（ホーロー語⁽³⁾）や「広東語」（客家語）を学習する日本人のための仮名表記（符号仮名）が作成され、これらを使用した学習書や辞書が刊行された。

台湾統治にあたり、総督府は「本島人」統治を目的として、「本島人」全体に対して国語（日本語）教育の実施を推進した。また、これと並行して、主に国語（日本語）教育の推進及び統治側の人材、特に警察官の育成を目的としたホーロー語の調査・研究も行われていた。

台湾においては、日本統治以前より、既にキリスト教宣教師によって確立されていた教会ローマ字（白話字）を用いてホーロー語の音を書き表してきた。この教会ローマ字を参考にしつつ、ホーロー語の音を書き表すための仮名として、補助記号を付けた符号仮名が作成された。この符号仮名による音注を施したホーロー語の辞書・教材・書籍が、台湾総督府学務部（1897年以降は学務課）から刊行された。これらの書籍で使用される符号仮名については、依拠すべき統一的な基準として認識されていたと考えてよい⁽⁴⁾。

また同時に、ホーロー語の調査・研究と同様の目的で、「広東語」の調査・研究も行われていた。そして、ホーロー語のために作成された符号仮名を「広東語」に転用し、それを用いて音注を施した辞書・教材・書籍が刊行された。ただし、ホーロー語符号仮名には統一的な基準となるものが存在したのに対し、「広東語」符号仮名については統一的な基準は存在しなかったことが、いくつかの資料から見て取れる⁽⁵⁾。

その理由としては、「広東語」はホーロー語に比べて話者がはるかに少ないため、研究があまり進まなかったこと、また次方言が多数あり内部差異が大き

いため⁶⁾、統一的な基準を定めることが難しかったことが考えられる。

ホーロー語については、1898年に『日台小字典』、1907年に『日台大辞典』が刊行されたのに対し、『廣東語辞典』の刊行は1932年まで待たねばならなかったというのは対照的である。これも統一的な基準がなかったことが関係しているであろう。

その意味において、「広東語」資料を研究対象とする際は、この点を常に念頭に置く必要がある。

3. 蟹撮・止撮・遇撮の舌音・歯音字の仮名転写

山村2020では、ゼロ韻尾音節の仮名転写について考察を行った。その結果、『用語（広東語）』を始めとする台湾総督府と関係がある刊行物と、『新語書』との間にはっきりとした違いが見られた。これは、総督府の研究成果がある程度共有されていた可能性を示している⁷⁾。

本稿では、仮名転写においてウ段で書かれるもののうち、蟹撮・止撮・遇撮の舌音・歯音字を抽出し、それぞれ『新語書』・『用語（広東語）』・『廣東語辞典』における符号仮名を示す。そして、台湾客家語の二大勢力とされる四県客家語・海陸客家語の字音に基づき、それらを4グループに分類、考察を行うこととする。

4グループは以下の通りである。

- ①四県客家語 -i — 海陸客家語 -i
- ②四県客家語 -i — 海陸客家語 -i
- ③四県客家語 -u — 海陸客家語 -u (A類)
- ④四県客家語 -u — 海陸客家語 -u (B類)

このうち、海陸客家語 -u (A類)は無声歯茎摩擦音に後続するもの、-u (B類)は無声後部歯茎摩擦音に後続するものである。

例字は、『汉语方言概要』〈第八章 客家方言〉内、梅県語において -ɿ 及び -u と発音する例として挙げられているものに従った。四県客家語・海陸客家語の字音は、全て『教育部 臺灣客家語常用詞辞典』による。『廣東語辞典』記載の声調符号は省略した。

なお、本節では『用語（広東語）』は『用語』、『廣東語辞典』は『辞典』と

する。

3.1 四県客家語 -i — 海陸客家語 -i

このグループは、四県・海陸客家語ともに、ts/ts'/s + -i（非円唇中舌狭母音）である。『新語書』・『用語』・『辞典』の三者全てで、基本的にウ段で転写される。

3.1.1 tsi²⁴（陰平声） — tsi⁵³（陰平声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
資			ツウ	止	開	三	平	脂	精
滋	ツー		ツウ	止	開	三	平	之	精
之	ツー	ツウ	ツウ	止	開	三	平	之	章

『辞典』には「ウ」と「ㄨ」の区別がある。凡例に「ㄨハ唇ヲ扁平ニシテ發音スル一種ノウノ音ヲ表ハス。^⑧」とあることから、「ㄨ」は -i（非円唇中舌狭母音）を表すと考えられる。『新語書』・『用語』には、この種の補助記号は見られない。

3.1.2 tsi³¹（上声） — tsi²⁴（上声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
紫	ツー		ツウ	止	開	三	上	紙	精
子	ツー	ツウ	ツウ	止	開	三	上	止	精

3. 1. 3 ts'i¹¹ (陽平声) — ts'i⁵⁵ (陽平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
慈	ツー		ツウ	止	開	三	平	之	従
磁			ツウ フウイ	止	開	三	平	之	従
辭	ツー		ツウ	止	開	三	平	之	邪
詞	スー		ツウ	止	開	三	平	之	邪
祠			ツウ	止	開	三	平	之	邪

『辞典』には「ツ」のように、閉鎖音や閉鎖摩擦音の下に「・」という補助記号を付けたものがある。凡例では「出氣音符號」とされるものである。「出氣音ハ カハア (kha) キヒイ (khi) 等ノ如ク常ニハ行音ヲ伴ヒテ發音セラル。」と説明されることから、これが有気音を意味することが分かる。また、『用語』にも同様の補助記号が見られる。『用語』には凡例はないが、用例から有気音を表すものと判断できる。『新語書』にはこの種の補助記号は見られない。

『新語書』「詞：スー」は、厦門語 su (陽平声) の影響が考えられる。

3. 1. 4 ts'i³¹ (上声) — ts'i²⁴ (上声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
此	ツー	ツウ	ツウ	止	開	三	上	紙	清

3. 1. 5 ts'i⁵⁵ (去声) — ts'i¹¹ (陰去声) ・ ts'i³³ (陽去声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
次	ツー	(パイ)	ツウ	止	開	三	去	至	清
自	ツー	ツウ	ツウ	止	開	三	去	至	従

『用語』「次：パイ」は、一種の訓読と考えられる。

3. 1. 6 si²⁴ (陰平声) — si⁵³ (陰平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
斯	スー		スウ	止	開	三	平	支	心
私	スー		スウ	止	開	三	平	脂	心
師	スー		スウ	止	開	三	平	脂	生
司	スー		スウ	止	開	三	平	之	心
絲	スー		スウ シイ	止	開	三	平	之	心
思	スー	スウ	スウ	止	開	三	平	之	心
梳	ソー		スウ ソオ	遇	合	三	平	魚	生

『辞典』「絲：シイ」は、四県客家語における別音 ci²⁴の反映と考えられる。

『新語書』「梳：ソー」・『辞典』「梳：ソオ」は、海陸客家語における別音 so⁵³の反映と考えられる。

3. 1. 7 si³¹ (上声) — si²⁴ (上声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
史	スー		スウ	止	開	三	上	止	生
使	スー スウ	スウ	スウ	止	開	三	上	止	生
駛	スー			止	開	三	上	止	生

3. 1. 8 si⁵⁵ (去声) — si³³ (陽去声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
士	スー		スウ	止	開	三	上	止	崇
字	スー	スウ	スウ	止	開	三	去	志	從
寺			シイイ	止	開	三	去	志	邪
事	スー	スウ	スウ	止	開	三	去	志	崇

『辞典』「寺：シイイ」は、厦門語 si (陽去声) の影響が考えられる。

3.2 四県客家語 -i — 海陸客家語 -i

このグループは、四県客家語では ts/ts'/s + -i（非円唇中舌狭母音）であるのに対し、海陸客家語では tʃ/tʃ'/ʃ + -i である。『新語書』・『辞典』では、基本的にイ段で転写される。一方、『用語』ではウ段で転写される。

3.2.1 tsi²⁴（陰平声） — tʃi⁵³（陰平声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
支	キー	ツウ キイ	チイイ キイ	止	開	三	平	支	章
枝	キー		キイ	止	開	三	平	支	章

『新語書』「支：キー」、『用語』「支：キイ」、『辞典』「支：キイ」は、四県客家語における白話音 ki²⁴の反映か、海陸客家語における白話音 ki⁵³の反映か判断できない。『新語書』「枝：キー」、『辞典』「枝：キイ」も同様である。

「支」については、四県客家語では文言音 tsi²⁴があるのに対し、海陸客家語ではそれに対応する文言音は見られない。従って、『辞典』「支：チイイ」は、廈門語の文言音 tsi（陰平声）の影響を考える必要がある。

3.2.2 tsi³¹（上声） — tʃi²⁴（上声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
紙	チー		チイイ	止	開	三	上	紙	章
旨			チイイ	止	開	三	上	旨	章
指	チー		チイイ	止	開	三	上	旨	章
止	チー シー	ツウ	チイイ	止	開	三	上	止	章

『新語書』「止：シー」は、何を反映するものかは不明である。

3. 2. 3 ts⁵⁵ (去声) — tʃi¹¹ (陰去声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
刺	チユツ		ツウ チウク	止 梗	開 開	三 三	去 入	寘 昔	清 清
致	チー	チイ	チイイ	止	開	三	去	至	知
至	チー	ツウ	チイイ	止	開	三	去	至	章
置	チー		チイイ	止	開	三	去	志	知
志			チイイ	止	開	三	去	志	章
痣	チー		チイイ	止	開	三	去	志	章
制			チイイ	蟹	開	三	去	祭	章

『用語』「致：チイ」の「チ」については、『辞典』の凡例に「チハ（中略）ティ (ti) ノ如ク發音セラル」とあるので、そこから ti と推定する。これは、厦門語 ti (陰去声) の影響が考えられる。

3. 2. 4 ts²⁴ (陰平声) — tʃi⁵³ (陰平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
痴			チイイ	止	開	三	平	之	徹

3. 2. 5 ts¹¹ (陽平声) — tʃi⁵⁵ (陽平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
池	チー		チイイ	止	開	三	平	支	澄
遲	チー		チイイ	止	開	三	平	脂	澄
持			チイイ	止	開	三	平	之	澄

3. 2. 6 ts³¹ (上声) — tʃi²⁴ (上声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
恥	チー		チイイ	止	開	三	上	止	徹
齒	チー		チイイ	止	開	三	上	止	昌

3.2.7 ts'i⁵⁵ (去声) — tʃ'i³³ (陽平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
雉	チー		チイイ	止	開	三	上	旨	澄
柿	キー		ツウ キイ	止	開	三	上	止	崇

『新語書』「柿：キー」、『辞典』「柿：キイ」は、海陸客家語 k'i³³の反映と考えられる。

3.2.8 si²⁴ (陰平声) — ji⁵³ (陰平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
施			シイイ	止	開	三	平	支	書
尸	屍シー		シイイ	止	開	三	平	脂	書
詩	シー		シイイ	止	開	三	平	之	書

3.2.9 si¹¹ (陽平声) — ji⁵⁵ (陽平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
時	シー	スウ	シイイ	止	開	三	平	之	禪

3.2.10 si³¹ (上声) — ji²⁴ (上声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
匙	シー		シイイ	止	開	三	平	支	禪
屎	シー		シイイ	止	開	三	上	旨	書

「匙」は、四県客家語では si³¹/ts'i¹¹、海陸客家語では ji⁵⁵である。

3. 2. 11 si⁵⁵ (去声) — ji¹¹ (陰去声) ・ ji³³ (陽去声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
示	シー		シイイ	止	開	三	去	至	船
視	シー		シイイ	止	開	三	去	至	禪
試	シー		シイイ チイイ	止	開	三	去	志	書
侍		スウ	シイイ	止	開	三	去	志	禪
世	シエー		シエエ シイイ	蟹	開	三	去	祭	書
勢	シエー		シエエ シイイ	蟹	開	三	去	祭	書

『辞典』「試：チイイ」は、海陸客家語における別音 tʃi¹¹の反映と考えられる。

蟹攝の「世」・「勢」は、四県客家語では se⁵⁵/si⁵⁵、海陸客家語では je¹¹/ji¹¹という音を持つ多音字である。『新語書』「世：シエー」・「勢：シエー」、『辞典』「世：シエエ」・「勢：シエエ」は、海陸客家語 je¹¹の反映と考えられる。

3. 3 四県客家語 -u — 海陸客家語 -u (A類)

このグループは、四県・海陸客家語ともに、ts/ts'/s + -u である。『新語書』・『用語』・『辞典』の三者全てで、基本的にウ段で転写される。

3. 3. 1 tsu²⁴ (陰平声) — tsu⁵³ (陰平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
租	ツー	ツウ	ツウ	遇	合	一	平	模	精
組			ツウ	遇	合	一	上	姥	精

3. 3. 2 tsu³¹ (上声) — tsu²⁴ (上声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
租	ツー	ツウ	ツウ	遇	合	一	上	姥	精
阻	ツー		ツウ	遇	合	三	上	語	莊

3.3.3 ts'u²⁴（陰平声） — ts'u⁵³（陰平声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
粗	ツー		ツウ	遇	合	一	平	模	清
初	ツオー	ツウ	ツウ	遇	合	三	平	魚	初

『新語書』「初：ツオー」は海陸客家語 ts'o⁵³の反映と考えられる。

3.3.4 ts'u¹¹（陽平声） — ts'u⁵⁵（陽平声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
鋤	ツオー			遇	合	三	平	魚	崇

「鋤」は、四県客家語では ts'u¹¹/ts'i¹¹、海陸客家語では ts'u⁵⁵/ts'o⁵⁵という音を持つ多音字である。『新語書』「鋤：ツオー」は、海陸客家語 ts'o⁵⁵の反映と考えられる。

3.3.5 ts'u³¹（上声） — ts'u²⁴（上声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
楚		ツウ	ツウ	遇	合	三	上	語	初

3.3.6 ts'u⁵⁵（去声） — ts'u¹¹（陰去声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
醋	ツー スー		ツウ	遇	合	一	去	暮	清

「醋」は、四県客家語では ts'u⁵⁵/ts'i⁵⁵、海陸客家語では文言音 ts'u¹¹/白話音 si¹¹という音を持つ多音字である。『新語書』「醋：スー」は、海陸客家語 si¹¹の反映と考えられる。

3.3.7 su²⁴ (陰平声) — su⁵³ (陰平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
蘇	スー		スウ	遇	合	一	平	模	心

3.3.8 su⁵⁵ (去声) — su¹¹ (陰去声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
素			スウ	遇	合	一	去	暮	心
訴	スウー		スウ	遇	合	一	去	暮	心
数	スー		スウ	遇	合	三	去	遇	生

『新語書』「訴：スウー」は、円唇母音であることを意識した結果と考えられる。

3.4 四県客家語 -u — 海陸客家語 -u (B類)

このグループは、四県客家語では ts/ts'/s + -u であるのに対し、海陸客家語では tʃ/tʃ'/ʃ + -u である。『新語書』・『辞典』では、基本的に拗音の -u で転写される。一方、『用語』ではウ段で転写される。

3.4.1 tsu²⁴ (陰平声) — tʃu⁵³ (陰平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
猪	チウー	ツウ	チュウ	遇	合	三	平	魚	知
諸			チュウ	遇	合	三	平	魚	章
株			チュウ	遇	合	三	平	虞	知
朱	チユー		チュウ	遇	合	三	平	虞	章
珠	チユー ツー		チュウ	遇	合	三	平	虞	章

『新語書』「珠：チユー」は海陸客家語 tʃu⁵³、「珠：ツー」は四県客家語 tsu²⁴の反映と考えられる。

3.4.2 tsu³¹ (上声) — tju²⁴ (上声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
煮	チユー チウー ツー	ツウ	チュウ	遇	合	三	上	語	章
主	チユー	ツウ ツウ	チュウ	遇	合	三	上	虞	章

『新語書』「煮：チユー／チウー」は海陸客家語 tju²⁴、「煮：ツー」は四県客家語 tsu³¹の反映と考えられる。

3.4.3 tsu⁵⁵ (去声) — tju¹¹ (陰去声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
著	チユー チウー チヨツ		チュウ	遇	合	三	去	御	知
註			チュウ	遇	合	三	去	遇	知
注			チュウ	遇	合	三	去	遇	章

3.4.4 ts'u¹¹ (陽平声) — tju⁵⁵ (陽平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
除	チウー		チュウ	遇	合	三	平	魚	澄
儲			シュウ	遇	合	三	平	魚	澄
厨		ツウ	チュウ	遇	合	三	平	虞	澄

『辞典』「儲：シュウ」は海陸客家語 ju⁵⁵の反映と考えられる。

3.4.5 ts'u³¹ (上声) — tju²⁴ (上声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
暑	チユー		チュウ	遇	合	三	上	語	書

3. 4. 6 ts'u⁵⁵ (去声) — tʃ'u¹¹ (陰去声)・tʃ'u³³ (陽去声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
箸	チュウ チウー		チュウ ・	遇	合	三	去	御	澄
處	チュー	ツウ スウ	チュウ ・	遇	合	三	去	御	昌
住	ツー チウー キー	ツウ ツウ ・	チュウ ・	遇	合	三	去	遇	澄

《教育部 臺灣客家語常用詞辭典》によれば、「箸」は“僅海陸用，四縣爲「筷」^⑨”，つまり海陸客家語にのみ見られるものであるため、四県客家語の音は収録されていない。従って、四県客家語の音については、『広韻』の反切から推定したものである。

『用語』「處：スウ」は、広州語の白話音 sy (陰去声) の影響が考えられるかもしれない。

『新語書』「住：キー」は、何を反映するものかは不明である。

3. 4. 7 su²⁴ (陰平声) — ju⁵³ (陰平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
書	シユー	スウ	シユウ	遇	合	三	平	魚	書
輸	シユー		シユウ	遇	合	三	平	虞	書

3. 4. 8 su¹¹ (陽平声) — ju⁵⁵ (陽平声)

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
薯	シユー		シユウ	遇 遇	合 合	三 三	平 去	魚 御	禪 禪

3.4.9 su⁵⁵（去声）— ju³³（陽去声）

例字	新語書	用語	辞典	撰	開合	等位	声調	韻目	声母
樹	シユー		シュウ	遇	合	三	上	麌	禪
署	シユー		シュウ	遇	合	三	去	御	禪

3.5 小結

以上、蟹攝・止攝・遇攝の舌音・歯音字について、『新語書』・『用語（広東語）』・『広東語辞典』における符号仮名を、四県客家語・海陸客家語の字音に基づき、考察を行った。

その結果、

- ①四県客家語 -i — 海陸客家語 -i
- ③四県客家語 -u — 海陸客家語 -u (A類)

以上の2グループでは、三者の音注は基本的に一致することが分かった。

その一方、

- ②四県客家語 -i — 海陸客家語 -i
- ④四県客家語 -u — 海陸客家語 -u (B類)

以上の2グループでは、『新語書』・『広東語辞典』と『用語』の間に明らかな違いが認められた。『新語書』・『広東語辞典』は海陸客家語と、『用語』は四県客家語の字音と概ね一致する。

これは、蟹攝・止攝・遇攝の舌音・歯音字については、『新語書』・『広東語辞典』が海陸客家語の字音を反映する資料である可能性を示している。

おわりに

『新語書』・『用語（広東語）』・『広東語辞典』は字書ではないため、全ての音節を網羅するものではなく、用字には偏りがある。特に『用語（広東語）』は戸口調査用のフレーズ集であるため、記載されているフレーズや字は限定的である。そのため、現段階では『新語書』・『用語（広東語）』とも大まかな傾向を述べるにとどめる。

3.5で述べたように、3.1～3.4での考察の結果が、『新語書』が海陸

客家語の字音を反映する資料である可能性を示している。さらに、3.4.6で述べたように、海陸客家語に見られる「箸」が『新語書』に記載されている点も、海陸客家語との親和性を示すものである。また、凡例に四県客家語に依拠するとの記述がある『広東語辞典』が、蟹攝・止攝・遇攝の舌音・齒音字については、むしろ海陸客家語との近似性を示すことも注目に値する。これらの傾向が部分的・限定的なものか、あるいは全体的なものであるかについては、今後総合的な比較作業を通じた考察により明らかにしたい。

また、ホーロー語の影響を考えるべき例も散見された。

『明治三十八年 臨時台湾戸口調査記述報文』から分かるのが、種族を超えた「福建語」の広がりである。「常用語及副用語」という調査項目のうち、「福建語」が「広東人」の「副用語」の67.7%を占めているだけでなく、「常用語」としても15.7%を占めているのである⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。「福建語」のこれだけの勢力の大きさを考えると、「広東語」話者にとってホーロー語の影響は決して小さいものではないと推測される。この点については、更なる調査・考察を要する。

現在、『新語書』および『用語（広東語）』の字音体系の整理作業が進行中であるが、声母・韻母の体系等の総合的な報告は別の機会に譲りたい。

註

- (1) 菅向榮『標準広東語典』「凡例二」で、仮名による標音システムを「符號假名」と称しているので、本稿もこれに従う。
- (2) 台湾に居住する客家人の多くが広東からの移住者であったため、日本統治期の台湾における客家語は「広東語」と呼ばれた。従って、この時期に使用される「広東語」という名称は、今日一般的に言うところの広東語（広州語）ではないことに留意する必要がある。これは、香坂順一が「本冊子の「広東語」とは臺灣に於ける所謂「廣東語」ではなく、廣東省城語即ち「廣州語」たることである。臺灣に於ける「廣東語」は、實は「客家語」であつて、支那方言の系統から言ふならば別な一系に屬する。この點誤解のない様にして戴きたい。」（『広東語の研究』緒言）と述べていることから分かる。本稿では、広東語（広州語）と区別するため、日本統治期の台湾における客家語を「広東語」と表記することとする。
- (3) 台湾では一般に「台語（台湾語）」と呼ばれる。また「閩南話（閩南語）」と呼ば

れることもあるが、比較的中立的な名称として「ホーロー語」の使用が増えているため、本稿では「ホーロー語」と表記する。「ホーロー」は「福佬」「鶴佬」「河洛」等の表記があるため、「ホーロー」とする。

- (4) 山村2019, p. 190 (61)
- (5) 彭馨平, p. 67~68
- (6) 山村2019, p. 193 (58)
- (7) 山村2020, p. 119-118 (116-117)
- (8) 『広東語辞典』は縦書きのため、引用文中のアンダーラインは、原文においては全て右傍線である。以下、『広東語辞典』凡例からの引用文にアンダーラインがある場合、全て同様である。
- (9) <https://hakkadict.moe.edu.tw/cgi-bin/gs32/gsweb.cgi?o=dalldb&id=%22HK0000001663%22&searchmode=basic&checknoback=1> (最終アクセス2020年10月30日)
- (10) 『明治三十八年 臨時臺灣戸口調査記述報文』, p. 232~235
- (11) 山村2019, p. 185 (66)

参考文献・資料

- ・菅向榮, 1933, 『標準廣東語典 附 臺灣俚諺集 重要單語集』, 臺灣警察協會
- ・臨時臺灣戸口調査部, 1905, 『明治三十八年 戸口調査用語』(外地国勢調査報告 第五輯: 台湾総督府国勢調査報告 第十二冊「明治三十八年 戸口調査用語 土語・広東語」, 2000, 文生書院)
- ・臨時臺灣戸口調査部, 1905, 『明治三十八年 戸口調査用語（廣東語）』(外地国勢調査報告 第五輯: 台湾総督府国勢調査報告 第十二冊「明治三十八年 戸口調査用語 土語・広東語」, 2000, 文生書院)
- ・臨時臺灣戸口調査部, 1908, 『明治三十八年 臨時臺灣戸口調査記述報文』(JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A06032544600、国立公文書館 所蔵)
- ・臺灣總督府, 1931, 『臺日大辭典』(1983, 『台湾語大辭典』, 国書刊行会)
- ・臺灣總督府, 1932, 『廣東語辭典』(1993, 『広東語辞典』, 国書刊行会)
- ・臺灣総督府民政局學務部, 1895, 『臺灣十五音及字母: 附八聲符號』(旧外地関係資料アーカイブ http://opac.lib.takushoku-u.ac.jp/kyugaichi/htmls/views/2017_005).

html)

- ・臺灣総督府民政局學務部, 1896, 『新日本語言集 甲號』(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/863157>)
- ・臺灣総督府民政局學務部, 1896, 『臺灣十五音及字母: 附八聲符號 訂正』(旧外地関係資料アーカイブ http://opac.lib.takushoku-u.ac.jp/kyugaichi/htmls/views/2017_006.html)
- ・北京大学中国语言文学系语言学教研室編, 1989, 『汉语方音字汇』, 文字改革出版社
- ・遠藤雅裕, 2016, 『台湾海陸客家語語彙集 附同音字表』, 中央大学出版社
- ・黄雪贞编写, 1997, 『梅县话音档』(现代汉语方言音库), 上海教育出版社
- ・香坂順一, 1942, 『廣東語の研究 附常用文字聲音字典』, 臺北高等商業學校調査課
- ・李榮主編, 1995, 『梅縣方言詞典』(現代漢語方言大詞典・分卷), 江蘇教育出版社
- ・羅濟立, 2007a, 『「廣東語會話篇(1916年再版)」の同字異注について — 声母を中心に』, 『台湾日本語文學報』22號
- ・羅濟立, 2007b, 『「語苑」から見た日本人による台湾客家語の学習研究 — 資料の内容と性質を概観』, 『地域文化研究』No.5
- ・中川仁監修、羅濟立著, 2019, 『「語苑」にみる客家語研究(日本統治下における台湾語・客家語・蕃語資料 第2巻)』, 近現代資料刊行会
- ・彭馨平, 民國100(2011), 「日治時期台灣的客語教材研究 — 以《廣東語集成》為例」, 國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所碩士班學位在职進修專班碩士論文
- ・富田哲, 1999, 「日本統治時代初期の台湾総督府による「台湾語」の創出」, 『国際開発研究フォーラム』11
- ・富田哲, 2003, 「1905年臨時台湾戸口調査が語る台湾社会 — 種族・言語・社会を中心に」, 『日本台湾学会報』第五号
- ・山村敏江, 2019, 『「日本広東学習新語書」及び『明治三十八年 戸口調査用語(広東語)』所収の符号仮名(1)』, 『神田外語大学日本研究所紀要』第11号
- ・山村敏江, 2020, 『「日本広東学習新語書」及び『明治三十八年 戸口調査用語(広東語)』所収の符号仮名(2)』, 『神田外語大学日本研究所紀要』第12号
- ・袁家驊等, 1983, 『汉语方言概要』, 文字改革出版社

『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年 戸口調査用語 (広東語)』所収の符号仮名(3)

ウェブサイト・資料

- ・教育部 臺灣客家語常用詞辭典 (<https://hakkadict.moe.edu.tw/cgi-bin/g32/gsweb.cgi/ccd=j6oEo0/webmge?>)
- ・中央研究院語言學研究所 客英大辭典查詢
(http://minhakka.ling.sinica.edu.tw/bkg/bkg.php?gi_gian=hoa)
- ・新北市客家語文館 (<https://www.hakka-language.ntpc.gov.tw/bin/home.php>)
- ・行政院客家委員會全球資訊網 (<http://www.hakka.gov.tw/>)